WeinreichとOdlinの比較研究から見た言語転移メカニズムの研究

米　田　佐紀子

序　論

外国語学習において母語の影響が出ることは多く知られている事である。その一方、その母語が外国語にさらされる事によって変化を生み出すことも起こる。これらの現象をよく観察してみると単に、「母語の影響」あるいは「目標言語の影響」と一言で片づけられないもの、つまり、「言語普遍性」が見えてくる。

言語接触から出てくる様々なデータを基にした研究は、言語普遍性を知る上で意義があるだけでなく、英語教育において重要である。本研究では、言語転移研究の意義から音声・語彙・統語・形態といった構造的な分野に焦点を当てる。

言語転移の研究が進むにつれて、当該言語間の影響だけでなく、転移現象の現われ方には第一言語の影響と言えない発話が見られることが分かるようになり、心理学的側面や社会・文化的側面からもアプローチすべきものと考えられるようになってきた。また、第一言語習得と第二言語習得の間に同じような発達が見られるという研究を踏まえて、第二言語習得だけでなく「言語習得」という広い視野から見る事も必要になっている。

言語教育という「人間」と「言語」を扱う分野では、このような全体的な見方は必要であるが、ともすれば関係要因の多さと複雑さの故に、敬遠されたり批判されたりする可能性がある。しかし「目録」として様々な現象を一つにまとめる事は、全体像を捉える事になり、言語教育の分野において大変意義のある事と考える。

そこで、本論文では、言語転移研究を概観するためにも、言語転移研究の始祖とも言えるWeinreichの研究*Languages In Contact*(1966)と最近の研究の一つであるOdlinの研究*Language Transfer*(2000)とを比べる事によって言語転移のメカニズムとその全体像を探っていく。

なお、この論文は2001年９月14日～16日に行われた第40回大学英語教育学会全国大会で口頭発表したものに加筆・訂正を加えたものである事を申し添えておく。

米田 佐紀子

第１章　Weinreich の研究と Odlin の研究の意義

1960年代に書かれた *Langauges in Contact* は構造言語学に基づいたもので、スイスを中心としたヨーロッパやアメリカでの言語接触についての研究である。対照言語学が批判される中で彼の書物が今も転移研究で意義を持つのかを先ず述べよう。Odlin（2000: 23-24）が述べているように、Weinreich の研究は借用転移のみならず基層転移の研究も多く引用し、その事例の多くは習熟度を異にする二言語併用者（バイリンガル）達の母語が第二言語に与える影響を扱ったものであり、両方の視点から広く観察している事、また文法や音声という構造面だけでなく社会一文化的な要素にも目をむけている点からいまだに学ぶところが多い。

言語転移の評価は、Weinreich が活躍した時代には「第二言語学習理論におけるもっとも重要な要因」という評価があったが、その後、普遍理論が盛んになるとその重要性に対する評価が衰退するのみでなく、言語転移そのものの存在すら否定するものが出始めた。しかし、近年になって、言語転移の役割や他の要因とどのように作用しているのかを認める傾向が出てきた（Odlin 2000 : ix)。Odlin は *Language Transfer*(2000) の中で、言語転移の性質、言語転移が第二言語習得において果たす役割などについて包括的に論じている。彼の議論は談話・意味論・統語論・音韻論・書記体系・その他の非構造的要因（個人・社会など）について様々な角度から切り込んでおり、「言語転移とは言語習得と応用言語学の研究の根幹をなす現象である」事を指摘していると Michael H. Long と Jack C. Richards は彼を高く評価している（Odlin 2000 : ix-x)。この点からも現代の言語転移研究を代表する書として Odlin と Weinreich を比較する事は言語転移研究を網羅するにあたり重要である。

本論文では、様々な分野のうち、音声や文構造など構造面について、どのようなメカニズムで転移が起こるのかを探っていく。

第２章　比較研究

本章では先に述べた二人の代表的な論文 *Languages in Contact*（Weinreich 1966) と *Language Transfer*（Odlin 2000) がそれぞれ、構造的分野に対してどのような考えを述べているのかを対照表にすることにより概観していく。ゆえに、片方が述べている事柄であっても、もう片方が述べていない場合、その項目に該当する言及がない著者の方は「言及なし」として空欄にすることによって差異が明らかに分かるようにした。またその際、各項目を表わす見出しの番号が対応するようできるだけ努めたが、視点の違いによる分類の仕方の差異のため必ずしも対応する番号がうまく呼応していない箇所もある。番号が呼応していないのに横に並んでいる場合は、別項目として述べられた項目同士が比較対照されていると考えて頂きたい。

第１節　研究の見地・言語転移の定義・起き易さについての比較

まず、本節では二人の研究見地と定義について見ていく。

	Weinreich の研究	Odlin の研究
見　　地	構造言語学	様々な言語学的立場（言語習得理論・類型論・普遍理論など）から転移を概観するという立場
定　　義	「干渉」として捉えている。 パタンの再構築のこと。	「干渉」でなく、「転移」と捉えている。 目標言語とどれにしろ以前に習得されたほかの言語との間の類似点および相違点から生じる影響のこと(Odlin 2000: 25-28)。 (1) 単に習慣形成の結果ではない。 (2) 単に干渉ではない。 (3) 単に母語への依存ではない。 (4) 必ずしも母語の影響ではない。
起き易さ	1．二言語の差異が大きいほど習得の困難度が増し、干渉の範囲が広がる。干渉を測定するには熟達度テストを用いる。そこから以下のものが見える。 構造： (1) 干渉の刺激と抵抗 (2) 構造的なもの＋非構造的なもの (3) 経済性と分かりやすさ ↓ この二つが言語システムが作られる機能的基盤である。 (1) 内的構造：文法・音声・語彙 (2) 外的構造：個人的特性、言語運用環境（対話者の二言語併用性、話者の感情移入）、社会的価値、純粋主義、 文化的文脈、接触の時間的長さなど 2．心理的現象である事と、社会－文化的要因と深く関わっている事は指摘している。ただし、過剰一般化については言及していない。 3．言及なし	1．対照分析では測定しきれない。なぜなら、言語間の相違点のうち、あるものが必ずしも重大な学習困難点に結びつかない例があり、母語の影響によるとは思われない誤りの出現が見られるからである。(Odlin 2000: 28-31) 2．誤り分析ではなく過剰一般化や訓練の転移と思われるものがある。転移は主として心理学的現象であるが、それが習得に与える潜在的効果はそれを取り巻く社会的環境の複雑な差異の程度に応じて大きくなったり小さくなったりする。 3．上記の理由から普遍性・言語習得・類型論との関わりを重視すべきと考える。

上記から分かるように、転移研究そのものに対する態度に違いが見られる。構造言語学的かつ対照言語学的に対象の言語を比較し、そこに生まれてくる差異や誤りに焦点を当てる Weinreich に対し、Odlin は対照言語学をすべて否定するわけではないが、それが持つ短所を言語普遍性、言語習得論、類型論からの研究結果で埋めようとする事により、より広い目で転移という言語現象を探っているのが分かる。

次に二人の構造面に対する切り込み方を見てみるが、二人は音声・音韻・形態・統語・語彙という点に着目している点では共通であるが、それ以外に Odlin は談話にも言語転移を解明する糸口があると考えている。本論文では、音声・音韻・形態・統語・語彙を中心に論じ、談話については必要な箇所のみ言及する事とする。

第２節　音声・音韻研究の比較

本節では音声・音韻における二人の研究を見ていく。以下の対照表で分かるように、両者とも接触言語両方の音声体系と音韻体系の記述及びその影響が大きい事を示唆している。

Weinreich の研究	Odlin の研究	備考
1．音素目録の相違と音韻ルールの影響が干渉を生み出すという考え方をしている。sound sequence や音韻にも目を向ける必要がある。一言語の音を認識し、再生するときの認識に関わるものである。 （以下の①～④の例は米田（2000）より） ①音素の弁別の甘さ ＜例＞日本人が英語において[r][l]の区別をしない。 ②過剰な音素弁別 ＜例＞アメリカ英語では[t][d]が第一強勢のある音節の後に来ると異音[ɾ]に変わるのを聞いて日本人がワラ＝水と捉える。 ③弁別の読み替え ＜例＞英語には二重子音がないが日本語の撥音を用いてペッパー（pepper）と理解する。 ④音代用 ＜例＞日本人が英語の[p][t][k]を日本語の声たて時間（voice onset time）で発音する。	1．音声・音韻的転移は他の構造分野と異なり、動機や英語圏での滞在年数よりも母語が何語かという事が問題になる領域である。二言語の音声の言語間比較には母語と目標言語の音韻体系の記述と音声体系の記述を含まねばならない。 (1) 音素的相違 言語間同一性の認定（interlingual identification）：学習者が母語と目標言語の間に認定する対応関係。 <u>影響を与える要因</u> ①類似関係 ②音素体系（非母語話者は外国語の音声を自分の言語の目録に照らし合わせて範疇化する。） ＜例＞スペイン語話者は[n]と[ŋ]に音素的対立を持たないので英語の発音で必ずしも正しく使用できない。 学習者が発音に成功するために、次第に目標言語の基準に接近していくという過程を取る。しかし、それには知覚の鋭敏さが必要であり、その鋭敏さには個人差がある。そのため母語の音韻型式による抵抗を克服できるのは高	・Yoneda(1998)によれば英語に長期間さらされた場合、日本人であっても音韻構造 CVC を C と VC に分ける可能性が出てくる。 ・単に、音素の構造を比較しても実際の二言語併用者（バイリンガル）は統語や語彙中の音の連続によって意味を捉えているので構造上の差異が誤りとして表われるとは限らない。

	度な音声的感受性を備えた個人であるという可能性がある。 (2) 分節的誤り 適切な分類の仕組みを作るには他の要因も考慮すべきである。 ①音素の誤り：二言語の音素目録が異なる時に生じる。 ②音声的誤り：音素レベルの対応関係に関わる。 ③異音の誤り：二言語の音素を同一視する時に生じる。 ④分布の誤り：音声の組み合わせ（音節の中のどこに特定の音があるか）の差異によって生じる。 (3) 超分節型式 強勢・語調・リズムに関わり、聞き手の理解を左右するもの。 語調言語（tone language）の音韻習得については母語と目標言語の間の類型的類似性によるところが大きい。→母語の文のリズムと高さの口調の総和が転移として第二言語に影響する。	
2．構造的要因：二重干渉。聞き手は自分の母語に照らし合わせてルールを考えるので、聞き手も「誤まった思い込み」をする。話し手は弁別不足によって誤まった発音をする。	2．聞き手についての言及はない。	
3．非構造的要因として社会や集団の態度による影響がある。	3．社会や集団の態度についての言及はない。	
4．言語普遍性や類型についての言及はない。	4．言語普遍性と類型 (1) 音素 Maddieson（1984）の研究を引用： 317の言語に見られる音素目録の研究による通言語的事実 /i/ /a/ /u/を持つ言語250以上 /b/は200近く /m/は300くらい /x/は76 /ts/は46	

	/h/は13 この事は音声には頻度が高いものと低いものがあり、低いものは成人学習者が持つ困難度とある程度相関関係を持つ。 (2) 音韻規則 通言語的に見て、語尾の子音の無声化の生じる頻度が高い。英語にはこれが関係ないが、英語話者はこの規則に困難を覚えない。→習得状況においても無声化の規則が見られ、このことは、目標言語のいずれとも無関係に存在する。 (3) 音節構造 ＣＶパタンはもっとも流布した音節型である。この事はすべての言語話者がＬ２においてＣＶを使用する可能性が高い事を示す。 (4) 発達的要因 Ｌ２の発音の研究には言語普遍性、類型論（通言語的音素の頻度数、音韻規則の自然さ、特定の音節構造への志向等が含まれる。）	

あくまでも対照言語学的立場を取る Weinreich は、次のように考えている。音素の転移は通常借用語を媒体として入る。入った場合、本来の音で再生するか受容言語のルールに当てはめるかの２つ選択がある。この基準は受容言語話者か二言語併用者かという個人や社会などの要因によって異なる。Odlin は、Weinreich のように母語の影響が外国語に出るのは、接触する言語が異なる音声・音韻体系を取るからであるという立場を取ると同時に、それだけでなく、言語の類型論と普遍的と思われる要因が転移と一体化して、あるいは独立して作用すると Odlin は述べている。

第３節　語彙研究の比較

本節では語彙の分野を見ていく。この分野を「語彙」として取り上げる Weinreich に比べ、Odlin は認知と深く関わる領域と捉え「意味論」で取り上げている。ここからも分かるように両者の切り込み方は大きく異なっている。あくまでも語形などに表れた現象を単純語や複合語句などに焦点を当ててみていく Weinreich と、そうではなく、人間のものの見方・捉え方から見ていこうとする Odlin との間にはこの分野に関して論点・観点ともに異なっているといえる。

Weinreich の研究	Odlin の研究	備考
１．語彙干渉のメカニズム (1) 単純語 ①たとえば間投詞（的用法）のような A 言語から B 言語への音韻的連続の明白な転移＜例＞アメリカにおけるノルウェイ語 blakkvolnot ‘black walnut’ ②A 言語の中に B 言語と似た単語があるとそれが A 言語の影響で意味が変わる（内容の修正）。これは語の転移と意味的拡張の両方と捉えられる。 ＜例＞ コロラドにおけるスペイン語 ministro(cabinet official)が英語の影響で新教の聖職者の意味になった。 (2) 複合語句 ①統語パタンに二つ以上の形態素から出来た句が適用された時に起こる。 ②借用翻訳：ことわざなどにも起こる再生産 (A) 本来的な借用翻訳：モデルが要素ごと入ってくる。 ＜例＞ルイジアナのフランス語 marchandises sèches（dry goods） (B) 借入表現：モデルになっている複合語が再生産のヒントになったもの。 ＜例＞sky-scraper にならった Wolkenkratzer（cloud scraper） (C) 借入創造：接触相手の言語にある名称にマッチさせるために作られる新造語に適用される用語 ＜例＞sibling によって創造されたイディッシュ語の	１．言及なし	通言語的な議論においては形態論、語形成、統語、表現法等を絶対的な制限を持って語る事はできない。

mitkind（fellow child）		
2．借入語彙の統合 (1) 用法における混同 (2) 古い語の消失 (3) 新しい語と古い語の両方の存続（特殊化）	2．言及なし。	
3．理由 (1) 新しいものを指示・説明する必要から。 (2) 表現力の欠如 (3) 意味区分が native の言語では不鮮明 (4) 社会的価値と関わるもの（ステータス）を示す手段	3．言及なし。	
4．対照言語学からみたメカニズムの選択 (1) 借用される単純語は意味的拡張によって、転移または再生産され得る。 (2) 複合語は分析的形態という形で転移するか借用翻訳か混合複合語で再生産される可能性がある。 理論的にも語彙形成について多くの制限を持つ言語はそれに比例して、外からの転移に対して抵抗が強く、その代わり、意味的拡張や借用翻訳を好む。	4．意味論・認知論から見たメカニズム (1) 認識の普遍性を示す徴候がある。 ＜例＞命題推理は言語を越えて一緒。 X は真である。ゆえに非 X は偽である。 その一方 Whorf のような見方もある。 ↓ 言語は認識に対して重大ではあるが絶対的ではない影響を与えるものである。(Odlin 2000: 71-75) (2) 意味的格：意味的役割 morphological case の果たす役割に着目すると諸言語を一貫性を持って分析する事ができる。このことは語彙的意味にも用いることができる。 ①語形が似ているから学びやすい/学びにくい ②語形は似ているが意味は異なる（落とし穴） ＜例＞prévenir(仏) と prevent（英） ③ 語形は似ているが用法が違う ＜例＞再帰代名詞を必要とするか否か *They retired themselves.（フランス語話者による英語）	
(3) 習得・普遍性についての言及なし。	(3) 習得と普遍性 ①語彙には意味情報の普遍的な格がある。	

	②子どもの語彙能力の進化には認知的発達の大きな進歩が伴う。 ③語彙意味論の分野で見られる誤りのうちの幾つかは、すべての言語習得状況の中で作用する過程の普遍性を示す。＜例＞過剰拡大や近似化は L1、L2の習得両方に見られる。	
5．Weinreich では、統語部門で扱っている。（第４節で論じる。）	5．語彙目録と形態論 語彙目録には、語の意味情報、形態的・統語情報も含む。 (1) 語彙的転移の事例は形態と意味の両者の転移である。 (2) 話し言葉・書き言葉両方において拘束形態素の転移を妨げる強力な制約がある。しかし、これは類似性が高い構造間では促進され、低いところでは起きにくい。＜例＞トルコにおけるギリシャ語にトルコ語の接尾辞が見られた事が報告。	

音声音韻論と同様、Weinreich は転移への抵抗や借用翻訳の方を好むなどの程度については社会―文化的要因が深く関わっていると述べている。それに対し、Odlin は認知に関する通言語的研究及び L1・L2の言語習得における語の意味の発達に関する研究において、普遍性の必要性は明白である。意味の研究が進む事によって、普遍性と（Whorf の）相対主義に関する L2の研究が談話・意味論・統語・そして下位体系の相互作用に進歩をもたらすと述べている。

米田佐紀子

第４節　統語・形態研究の比較

本節では文法について概観していく。

Weinreich の研究	Odlin の研究	備考
１．干渉分析の方法・基準 (1) 形態素と語順・一致・依存・文法単位・ストレス・ピッチの区別 （これは各言語で制限が異なるのでそれをきちんと踏まえる事が大切である。） (2) 義務度のカテゴリー (3) カテゴリーを表わす形態素の語順・統語法的拘束の大きさ・小ささ（しかし、形態素と文法関係は同一視を受けやすい） ＜例＞ ①B 言語で A 言語の形態素を使用する。 ②B 言語の運用において A 言語の文法的関係で B 言語の形態素を用いる。 ③A 言語の形態素と B 言語の形態素を同じと見なし、A 言語の文法をモデルとして B 言語に変化をもたらす。 ２．転移可能性 条件 (1) 適合した文法構造と演繹的に似通った語彙 (2) 結束形態素より自由形態素が変わり易い（リスト） → 縮小傾向 独立副詞　名詞　前置詞 ＞完全語　動詞　＞文法（助動詞＞　＞屈折語尾 間投詞　形容詞　冠詞 (3) 表現の強化のため（二言語併用には情緒的なものが関与）。これは、二言語併用者（バイリンガル）は気づいて	１．転移可能性、語順、言語普遍性、習得論などの観点から検討している。 ①語彙的転移の事例は形態と意味の両者の転移である。 ②話し言葉・書き言葉両方において拘束形態素の転移を妨げる強力な制約がある。しかし、これは類似性が高い構造間では促進され、低いところでは起きにくい。＜例＞トルコにおけるギリシャ語にトルコ語の接尾辞が見られた事が報告。 ２．転移可能性：正の転移と負の転移がある。 (1) 正の転移：通言語的類似点が幾通りもの形で正の転移を生じる事がある。＜例＞母音体系間の類似は母音の識別を容易にする。	「意味論」で既出の事項であるが、Odlin は「語彙目録と形態論」の項目で左記のように言及している。左記の①および②は Weinreich の項目「１」と「２」の両方にまたがるため、間をあけて記述する。

いても単一言語話者は見落とす。 (4) 形態素の複雑な機能　＜例＞ヘブライ語では4つの stem 子音までで5つ以上の子音を持つ動詞は使えない。これは抵抗となる。		
3．文法関係の干渉 タイプ (1) 別の言語の文法関係を複写する事によって意図しない意味を伝えてしまう。 (2) 別の言語の文法関係を複写することによって既存の文法パタンを壊してしまい、無意味な文を作る。 (3) 不必要に A 言語の文法関係を B 言語にない文法関係の同等領域に付加する 領域：語順・イントネーション・一致と依存	3．文法関係における誤り：負の転移 これは目標言語からの逸脱を含むのでその確認は簡単である。 (1) 表出不足＝回避　目標言語の話者に比べて使用頻度が少ない用例や構造が見られる。 (2) 表出過剰 (3) 表出の誤り ①代用 substitution：時には母語形式を使用する ②翻訳借用 calques：母語の構造を反映する ＜例＞ *Let's quickly put the fire out.（スペイン語話者によるもの） ③構造の改変 (4) 解釈の誤り　目標言語の語順の型や音組織が異なる場合や文化的前提が異なる場合に起こる。	
4．同価形態素に対する複写機能 A 言語の中にある形態素または文法範疇で B 言語と同一と見なす事があった場合、その人は A 言語のシステムに由来する文法機能の中に B 言語の形態を適用する事も起こり得る。 ↑ 形態上の類似性 機能の類似性	4．語順（Weinreich の項目４と５に対応） (1) 厳格さの相違：拘束形態素の体系への依存は柔軟な語順を持つ言語に良くある。＜例＞ロシア語 (2) 厳格さの転移可能性：厳格さは転移しうる。＜例＞語順が柔軟な言語を母語とする話者は英語の語順が極めて厳格であるのに拘わらず、英語を話すときに数種類の語順を使用する可能性がある。 (3) 節内部の語順 データには基本語順と同じように母語の転移が見られるものがあるが、同時に統語的過剰一般化と転移の相互作用から生じたと思われるものが見られる。 (4) 関係節 ①母語において LBD（Left Branching Direction 左枝分か	
5．義務的弁別の放棄 格・性・相の放棄		

	れ）が優勢である場合、英語のRBD（Right Branching Direction 右枝分かれ）形式を習得するのは困難である。（転移） ②どの言語の母語話者でもGENとOCOMPの位置では再叙代名詞を使用する傾向があり、作文においてはSUはDOより、DOはIOより使用頻度が高い。（普遍性） ①と②から最も回避しそうな関係節のタイプが予測・洞察される。 (5) 否定 否定辞が動詞の前か後かは転移と普遍性の関係を知る重要な手がかりとなる。が、データによれば、これらだけでなく、「普遍的な言語処理能力」が関係していると思われる。 ＜例＞習得順位（言語に関係なく） 1語否定→　2語否定　→　複雑な型式の否定	
6．構造外要因 接辞形態素も含め、完全な文法的パタン 義務的範疇が任意になったり、放棄されたり、また他のモデルが明示性が高いという理由で複写されたりする。 7．談話についての言及なし	5．Weinreichの6及び7に対応 明示性よりは談話的要因を挙げている。 談話を基盤とする議論：早期の学習者の語順型は「非統語的」であり、談話機構の普遍的原理を反映する。 普遍文法に基づく議論：L1にもL2にも統語機構の何らかの生得的原理が働いている。 ↑ 転移も認められる：VSO言語であるフィリピン諸語話者がVSX文を多数作り、VOS言語である日本語話者がSXVを作る事が報告されている。 談話の要因：談話を基盤とする議論として、習得の早期段階に学習者の語順型は「非統語的」であり、談話機構の普遍的原理を反映するという考え方。談話が語順に影響を与えている。 ①自由語順は談話を考慮した場合誤解を招く可能性がある（話し手は必要があって語順を変えたと思われる。）	

	②談話の普遍性が語順に影響を与えている可能性がある。 ↓ ・情報の慣例的方法は「話題（topic）—評言（comment）」の順序を適用する事である。 ・「話題継続性の普遍的原理」における統語的手段の段階表（オドリン1995：106） もっとも継続的な話題 ↓ 照応語不在 無強勢の代名詞 右方転移 中立的順序 左方転移 もっとも非継続的な話題	
8．*Languages in Contact* の第３章の「二言語併用者個人」で、二言語併用者を性格・知能・言語の社会的地位・言語熟達度など広い角度から考察している。	6．習得期間の差異（Weinreich の８に対応） ある外国語を数年間学習すると類似の言語を習得するのに有利である。この事は似ているものは短い時間で習得しやすいという事を示す。	

Weinreich は、受容言語の体系中に被転移語を統合するかしないかという選択については、音よりも文法に関しての方がはっきりしていると述べている。その選択は接触している言語の構造によるのではなく、心理的かつ社会－文化的要因によるものが大きいと考えている。それに対して、Odlin は類型論と普遍的影響が習得過程の中で作用していると考え、語順全体は談話がもたらす言語普遍性の影響であり、関係節については類型論的要因、否定については習得順位に共通性があることから言語処理能力が関わっているというように、それぞれの要因がそれぞれの局面で影響を及ぼしていると考えている。

結　論

この概観によって、1960年代において Weinreich がいかに包括的に言語転移（彼は干渉と呼んでいる）を研究したかが分かると同時に、Odlin の研究によって対照言語学のみでは解決できない諸要素が言語転移にはある事が明確となった。これら明らかになったことをまとめてみると次のようになろう。

(1) 言語転移は L1から L2、L2から L1という表層的な現象の下に多くの研究課題を含んでいる事。

(2) 言語転移の起こり方には、一定のパタンが見られ、そのパタンは発達段階によってそこに関わる要因が異なる事。

(3) 言語転移は心理的要因、発達的要因、習得に関わる要因、社会―文化的要因と共に、言語普遍性などを考慮に入れ、総括的に見ていかなければ、その全体像をつかむ事はできない事。

著者は今後更に、理論的な足場固めをすると共に、現地調査で得たデータなどを分析し研究を進めて行く考えである。

[謝辞]

本論文を作成するにあたりご助言・ご指導くださった金沢大学の岡崎文明教授に感謝を申し上げたい。

[参考文献]

ODLIN, Terrence. (2000). *Language Transfer.* Cambridge University Press.
（オドリン、 T.『言語転移』丹下省吾訳　リーベル出版　1995）

WEINREICH, Uriel. (1966). *Languages in Contact.* Mouton & Co.
（ワインライヒ、U.『言語間の接触―その事態と問題点―』　神鳥武彦訳　岩波書店　1976）

YONEDA, Sakiko. (1997). A Case Study of Language Transfer: An Investigation into the Influence of L2 on L1. *Socio-Environmental Studies No. 2, Graduate School of Socio-Environmental Studies of Kanazawa University.* pp. 171-184.

-----. (1998). Experimenting with the Internal Structure of the Syllable in Japanese. *Bulletin of Hokuriku Gakuin Junior College No. 30.* pp. 173-190.

米田佐紀子著　「二言語併用者個人についての研究—Weinreich の *Languages in Contact* とその後の研究—」
『北陸学院短期大学紀要 第31号』 1999.　pp. 145-157.
———　「言語干渉基礎研究—Weinreich の *Languages in Contact* に見られる言語干渉の定義・研究意義と音声干渉の研究—」
『金沢大学大学院社会環境科学研究科紀要 社会環境研究第5号』2000.　pp. 55-65.
———　「文法に関する言語転移基礎研究—Weinreich の *Languages in Contact* における文法転移研究を中心として—」
『北陸学院短期大学紀要　第32号』 2000.　pp. 131-139.